

私は、死ぬのは少し怖い。まだまだやりたいことだっというっぱいあるし、十二年しか生きていない。しかし、プロジェクトリアのアシュリーは違った。アシュリーさんは、死ぬのは怖くないと言っている。

私とアシュリーさんは、年が六つしか離れていない。人によっては「六つも離れている」と思う人もいるだろうが、私にとっては「六つしか離れていない」のだ。アシュリーさんを初めて見たのは小学生の時だ。たまたまつけていたテレビにアシュリーさんが映っていた。もっと知りたかと思つた。そして、何年かたった今、この本を読んで作文を書いている。

アシュリーさんは、プロジェクトリアといつて、人より十倍くらい速く老化が進んでしまう病気を持っている。しかし、死はだれにでも訪れるもの。恐れるなんて、意味がないことだと思つている。

私にはその発想はあまり思いつか

なかつた。死んだらどうなるか分からないからだ。そして、少し寂しくなると思う。だが、考えてみればそうだ。死は誰にでも訪れる。死なない人間はいない。だから、私だけが死ぬわけではないのだから、寂しくはないのかも知れない。

アシュリーさんの頭には、髪の毛がなく、血管が見える。だから人からじろじろ見られることがあるそうだ。しかしアシュリーさんは、「プロジェクトリアという病気を知らないだけ。」と気にしないそうだ。私だったら、じろじろ見られるたびにそわそわして、時には怒ったりしてにらんだり、その場で泣いているかも知れない。そして、自分自身を恨むかも知れない。そう思うと、アシュリーさんは、強いと思う。そんなことが何日もあったら、きつとほとんどの人が疲れてしまふだろう。私は、どうしたらそんな風に強くなれるのか、これから時間をかけて考えていきたい。

プロジェクトリアは、人より十倍速く老化が進んでしまう分、人より寿命が短い。平均寿命は十三歳だ。この本は、アシュリーさんが十四歳の時に心の内を語つた本だ。今、私は十二歳だが、もうすぐ十三歳になる。プロジェクトリアの平均寿命だ。私は特に何ともなく、ここまで元気に育っているが、もしかしたら交通事故に遭うかも知れない。殺されてしまうかも知れない。そう思うと、やっぱり不安になる。

だが、アシュリーさんは、またしても私と思つていることが違つた。アシュリーさんは、「生きるチャンスを与えられているのだから、私は、自分の定められた時間が来るまで、健やかに生きていたいと思う」と言つていたのだ。やっぱりアシュリーさんは、強く前向きな人なのだ。私は改めてそう思つた。もう一つ、強く前向きでいたら、人生もつと楽しくなると思つた。

私は、この後のアシュリーさんがどうなったか、とても気になった。調べてみると、アシュリーさんは、二〇〇九年に亡くなつてしまつたそ

うだ。十七歳だった。私は、もつと生きていてほしかった。だが、アシュリーさんは、プロジェクトリア患者としては、最高齢だった。これはとてもすごいことだと思う。

私は、これからの人生、もつと前向きに生きていこうと思う。今までが前向きでなかつたというわけではないが、何度か落ち込んだりすることとはあつた。だから、もつと前向きに行こうと思つた。そしてもう一つ、もつと強くなりたい。強ければ、これからどんな壁にぶつかつても、立ち向かう勇気がつくと思う。

そして最後。私は人生を無駄にしたくない。自分の人生を一生懸命生きたい。

